

大好き！絵本

初瀬 恵美



『小さなお城』
文：サムイル・マルシャーク
絵：ユーリー・ワスネツォフ
訳：片岡みい子
出版社：平凡社

早いものでもう3月。年長さんは、残りわずかの園生活となりました。先日の劇場ごっこは、ご多用の中沢山の方にお越しいただいて、ありがとうございました。今年度は『小さなお城』という絵本と『丸山亜季 歌曲集 小さいお城』をもとに、ストーリーを短くして劇にしました。そこで、今月は、劇場ごっこのもとになった絵本を紹介させていただきます。

『小さなお城』は、民話をもとに子ども向けに書かれた戯曲です。『12の月』(邦題『森は生きている』)でも親しまれているマルシャークによるものです。

野原に小さなお城がたっていました。お城を見つけて、次々と動物たちがやってきてみんなで楽しく暮らすことになりました。カエルのケロロがパイを焼き(劇ではパンを焼いていました)、ネズミのチュッチュが粉をひき、おんどりは窓辺でアコーディオンをひき、はりねずみは、小さなお城を守るため夜も決して眠りませんでした。

そこへ、お腹をすかせたはらぺこオオカミがやってきました。オオカミは、赤毛の狐と熊を仲間にして、パイやおんどりをだまして食べようとします。

しかし、お城に住む動物たちも、知恵と力を合わせて戦い、見事オオカミ、キツネ、熊をやっつけるお話です。

右の挿絵は、オオカミ、狐、熊をやっつけて、晴れ着を着て、お祭り騒ぎをしている場面です。この絵を見ながら、子どもたちは窓の向こうに見える黒いシルエットが誰かと推測して盛り上がっていました。他にも、挿絵を見るだけで物語を語れるほど、お話の世界をよく知っていて、楽しく語ってくれました。

毎年のことですが、劇場ごっこのお話は、劇に参加しない2歳児さんも含めクラス全体で盛り上がります。劇の歌を自然と口ずさんだり、人形を使って劇の再現を楽しんだりしていました。当日は、大勢のお客さんに圧倒されて恥ずかしかったり、お家の方が良かったりして、舞台にたてなかった子もいましたが、リハーサルや遊びの中では楽しんで演じる姿がみられました。自分の役に誇りをもっているようにも感じました。この絵本は、きっと特別な一冊になっていることと思います。子どもたちの一生の記憶に残るであろうこの絵本を、ぜひお家の方も、ご覧になられてみてください。

